

## 「役人の息子のいやし」

ヨハネの福音書 4:43～54

### 1. 異邦人のガリラヤ

4:43 さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。

イエシュアは、弟子たちと共にエルサレムからユダヤを経てサマリヤを通り、そしてガリラヤへと向かわれます。そもそもイエシュアの働きはこのガリラヤから始まっていますので、正確には戻って来られたということなのです。

4:44 イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。

他の福音書でも同様の言葉が記されていますが、それはすべてイエシュアが育ったガリラヤのナザレを指して言っています。ところがこのヨハネの福音書だけは全く逆というか、むしろユダヤ地方を指しているように思えます。たしかにイエシュアはユダヤのベツレヘムでお生まれになっていますので、理屈としては間違っていないのですが、他の福音書とこうも食い違うのは珍しいことです。しかしヨハネの福音書の筆者は、この箇所におけるガリラヤの異邦人的な部分を強調させるために、あえてこのイエシュアの証言を用いていると考えられます。

#### イザヤ 9:1～2

9:1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。

9:2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

たしかに当時のガリラヤは、異邦人とユダヤ人が混ざり合った形で構成されており、モーセの律法やユダヤの習慣に対して無頓着であったり、あるいは独自の捉え方をしていたりしていました。そのため律法の専門家であるパリサイ人や祭司たちからは「地の民」と呼ばれ、粗野で教養のない人々として軽蔑されていました。この箇所は、そんな「異邦人のガリラヤ」に焦点を当てて考えてみる必要があります。

4:45 そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなされたすべてのことを見ていたからである。

同じ神様を信じていながら、異邦人と呼ばれる彼らガリラヤ人がイエシュアを迎え入れました。これは今日のキリスト教界に見られるように、イエシュアの福音が、ユダヤ人ではなく私たち異邦人に広く宣べ伝えられ、受け入れられていった経緯に表れています。イエシュアの12弟子のうち、イスカリオテのユダを除く11人がみなガリラヤ人でした。この弟子たちから今日のキリスト教、教会が始まります。つまりこの箇所における一連の出来事は、イスラエル、ユダヤ人に対してではなく、異邦人の教会、クリスチャンに対するものであると考えられます。そのような視点で、この後に起こる出来事の意味を考えてみたいと思います。

## 2. カナの婚礼との共通点

4:46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。

イエシュアの最初のしるしとして行われた、水をぶどう酒に変える「カナの婚礼」での出来事。実はここでの出来事は、ヨハネ 2:1~11 にありますカナの婚礼での出来事と描き方が非常に似ています。その類似点、共通点を抜き出しながら話しを進めていきます。

まず第一の共通点は、先ほどの 4:43 にあります「二日の後」という冒頭の言葉です。一方カナの婚礼の箇所は「三日目(2:1)」という書き出しから始まっています。どちらも同じ意味です。三日目と聞いて思い浮かべるのはやはりイエシュアの十字架の死からの復活です。聖書が示す復活とは、死んだ者が生き返ることではなく、朽ちることのない永遠の肉体が与えられることを意味します。つまりカナの婚礼もこの箇所も、永遠に生きる世界についてのしるしであるということだと考えられます。そして同様に、場所が同じカナであるということが大きな特徴です。カナの語源であるカーナー(קָנָה)には「買う、買い取る」という意味と「創造する、形づくる」という意味があることは以前お伝えしましたが、カーナーにはもっと重要な意味があることが解りました。それは箴言 8:22 の御言葉にあります。

### 箴言

8:22 主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。

8:23 大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。

8:24 深淵もまだなく、水のみなぎる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。

8:30 わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。

この「わたしを得ておられた」と訳されている部分がカナ、カーナー(קָנָה)です。この「わたし」という存在が、神である主、父なる神様のかたわらでこの世界のすべてを組み立てられた、創造された、それが御子イエシュアであることが解ります。すなわちこのカーナーは、イエシュアの御子としての、創造主としての存在を象徴する言葉なのです。ですからイエシュアはこのカナで最初のしるしをこのカナで表し、その後エルサレム、ユダヤ、サマリアを訪れながらも、第二のしるしであるこの箇所の出来事もやはりこのカナで表されるのです。カナに始まりカナに終わる、これはイエシュアの神性宣言「わたしがそれだ」と言わんばかりの、神様による神様としての主張、強調を表す行動だと思われます。

4:47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやして下さるように願った。息子が死にかかっていたからである。

ここにもカナの婚礼と共通する出来事が記されています。それは「緊急事態発生」です。カナの婚礼での緊急事態は、婚礼の最中にぶどう酒がなくなるというものでしたが、ここでは「息子が病気で死にかかっている」というものでした。そしてカナの婚礼では、イエシュアの母が「ぶどう酒がありません！」とイエシュアに詰め寄りましたが、ここでは息子の父親である王宮の役人がイエシュアに願っています。

4:48 そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」そしてカナの婚礼との共通点がここにもあります。カナの婚礼では「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方、わたしの時はまだ来ていません」という叱責とも取れる一見冷たい態度を取られました。ここでも同様にイエシュアはこの息子の父親である役人に対して叱責の言葉を述べ、一見冷たい態度を取っておられるように見えます。

4:49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」そんな冷たい態度を取られるイエシュアに対して、カナの婚礼でのイエシュアの母にしても、この役人にしても、その願おうとする気持ちが揺らぐことはありませんでした。

4:50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。

息子の父親である役人は、イエシュアの言葉に聞き従って帰途につきました。カナの婚礼では、イエシュアの母が手伝いの者たちに「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」と聞き従うよう言いつけました。この見ないで信じる、すなわち信仰もまた重要な共通点として挙げられます。

4:51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。

このしもべたちの存在も共通しています。カナの婚礼ではイエシュアの指示に従って水がめに水を汲んだ手伝いの者たちがいました。そして最後の共通点は、イエシュアの言葉を信じ、従った結果、奇蹟が起こることです。水がぶどう酒に変わる事、そしてこの役人の息子が癒されること、そのどちらもイエシュアは言葉だけで事をなさっておられます。

【 二つのしるしの対比 】

	カナの婚礼	役人の息子の癒し
冒頭	三日目に (2:1)	二日の後 (4:43)
場所	ガリラヤのカナ	ガリラヤのカナ
事態	ぶどう酒がなくなった	息子が死にかけている
求め	イエシュアの母	王宮の役人
叱責	「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方、わたしの時はまだ来ていません。」(2:4)	「あなたがたは、しるしと不思議を見ない限り、決して信じない。」(4:48)
信仰	母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」(2:5)	イエシュアを信じて、帰途についた。
奇蹟	水がぶどう酒に変わった	息子の熱が下がった
しもべ	水をくんだ手伝いの者たち	知らせに来たしもべたち

このように、最初のしるしである「カナの婚礼」と、この「役人の息子の癒し」は、対比するように同じ構成で描かれていることが解ります。つまりこの二つの出来事は、同じメッセージを持っているということです。

しかし両方が全く同じ内容を取り扱っているということではなく、旧約聖書と新約聖書のように、一方がもう一方を補うような形で、組み合わせさせて一つのメッセージを形成しているということだと考えられます。そのメッセージとは、当然御国の福音、ご自分の家である御国を建てようと働かれる神様のご計画であるわけですが、それが一体どのように記されているのかを探ってみましょう。

まず最初のしるしである「カナの婚礼」で、その大枠の部分が表されていました。それはすなわち婚礼に表されているように、神様のご計画とは、神と人が共に住む家、家庭を作る、すなわち「結婚」にたとえられるものであるということでした。そして婚礼の最中になくなってしまったぶどう酒は、良いぶどう酒ではない、つまり悪いぶどう酒というユダヤ的観点で捉え、これを神様に聞き従わなかったために滅びてしまったイスラエルにたとえられているということでした。そして水をぶどう酒に変える奇蹟は、そのイスラエルの回復、真のイスラエルの完成を意味していました。ですからカナの婚礼の奇蹟はまさに旧約聖書、すなわちイスラエルに焦点を当てた形で表された神様のご計画の啓示と考えられます。ということは、文脈的にガリラヤの異邦人性を強調している点から見ても、この役人の息子の癒しは新約的、異邦人に焦点を当てた神様のご計画のそれだと考えられます。ではそれを踏まえて、神様のご計画の視点で、もう一度この出来事を読み返してみましょう。

### 3. しるし

4:46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。

4:47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやして下さるよう願った。息子が死にかかっていたからである。

まず登場人物たちの位置関係を見てみますと、イエシュアは山地の村、カナにいます。そして死にかかっている息子はそのカナから下って行く場所、低地のカペナウムにいます。カペナウムは「塗る、なだめる、償う、贖う、赦す」という意味のカーファル(כפר)と、「悲しむ、あわれむ、思い直す、恨みをはらす、慰める」という意味のナーハム(נחם)が組み合わせられた言葉であることを以前お伝えしました。どちらも救いを指し示す言葉です。そのカペナウムに、今にも死んでしまいそうな子どもがいます。カーファルとナーハムが救いを意味するならば、この子どもは、イエシュアを信じて救われ、先に地上での生涯を全うしたクリスチャンたちを表していると考えられます。一方この息子の父親である王宮の役人はどこにいるのかと言いますと、イエシュアと共に山地の村、カナにいます。つまり息子とともにはいないのです。これはカナを神様のおられる所、すなわち天とし、そしてそこから「下って行く」すなわち天の下、カペナウムを地にたとえていると考えられます。そしてイエシュアはご自分を御父である神様にたとえ、王宮の役人をご自分すなわちメシアであるイエシュアにたとえておられると考えられます。

4:48 そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」イエシュアの言われる通り、これはしるしなのです。しるしとは、本体となる事柄を指し示すものであり、本体そのものではありません。要するに別のものに置き換えて、たとえられているのです。ですから私たちはしるしを見て信じると言っても、そのしるしが一体何を指し示しているのかが理解できなければ、一体何をどう信じれば良いのかが解りません。イエシュアの表されるしるしと不思議が一体何を意味しているのかを探るこ

とは、私たちが神様を信じるといふ行為において非常に重要です。

4:49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」

4:50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。

「息子は直っています。」と訳されていますが、ヘブル語ではハイ(חי)という言葉が使われており、これは「生きる、生きている」という意味です。たとえ病が癒されても、人はいつか必ず死にます。イエシュアはこのしるしを通して、イエシュアの言葉によって永遠に「生きる」ことを提示しておられるのです。神様のご計画は、神様と人が共に永遠に生きることです。

そしてイエシュアにたとえられた御父は、イエシュアにたとえられた王宮の役人に「帰って行きなさい」と命じられます。ここにイエシュアが、カペナウムにたとえられる地上に帰って行かれる姿が、しるしとして表されています。つまりこれは再臨を意味していると考えられます。しかしこれがいわゆる再臨、イエシュアの地上再臨をあらわしているものではないことが次の節で解ります

#### 4. 空中再臨

4:51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。

イエシュアにたとえられた王宮の役人が、「下って行く途中」、つまりイエシュアが地に下って行く途中、すなわち「空中」でもべたちに出会うことが記されています。つまりこれは教会の携挙、「空中再臨」を表していると考えられます。

#### I テサロニケ

4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

これは空中携挙、イエシュアの空中再臨を示す代表的なみことなです。「キリストにある死者」を死にかかっている役人の息子にたとえ、その息子が癒されたことを知らせに行くしもべたちが、「生き残っている私たち」クリスチャンたち、教会にたとえられていると考えられます。

4:52 そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、第七時に熱がひきました」と言った。

「第七時」、これは空中再臨の時を示す言葉です。黙示録 8 章にこのような記述があります。

#### 黙示録

8:1 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。

8:2 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

8:3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

第七の封印、七人の御使い、七つのラッパ、まさに「第七時」第七の時です。そしてすべての聖徒、そして「立ち上る」香の煙。この箇所も、「すべての聖徒の祈り」を先ほどのテサロニケ I 4:16 でいう「キリストにある死者」、「香の煙」を同じくテサロニケ I の 4:17 でいう「生き残っている私たち」、すなわちクリスチャンたち、教会にたとえた、空中携挙、空中再臨を表すみことばと考えられます。それが起こる時が、第七時、小羊が「第七」の封印を解いた時だと考えられます。

4:53 それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。

第七時、空中再臨が起こるための第七の封印を解くのは小羊、イエシュアです。イエシュアの言葉によって役人の息子が癒された、生きたように、イエシュアによって空中再臨、空中携挙は行われるのです。そしてイエシュアを信じる者はみなすべて、天に、神の御前に香の煙のように立ち上っていくのです。

出来事に象徴される神様のご計画

役人の息子のいやし	神様のご計画（空中再臨）
二日の後（三日目）	イエシュアの復活
カナ（山地）	天
カペナウム（低地）	地
イエシュア	父なる神
王宮の役人	イエシュア
息子	キリストにある死者（テサロニケ I 4:16）
しもべたち	生き残っている私たち（テサロニケ I 4:17）
第七時	第七の封印（黙示録 8:1）

## 5. 第一と第二

4:54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。

異邦人のガリラヤに示された第二のしるし、それは空中携挙、空中再臨に関するものでした。これは第一のしるし「カナの婚礼」の中には表されなかった真理、神様のご計画です。しかし第一のしるしと同じくらいに重要な計画であるため、イエシュアはもう一度カナに戻り、第一のしるしに結びつけるように、この第二のしるしを表されたのです。ちなみに第三、第四などと称されているしるしはありません。イエシュアは数多くのしるしを行っておられますが、頭に数字が宛がわれているしるしはこの「カナの婚礼」と「役人の息子のいやし」の二つだけです。つまりこの二つで一つ、完結、完成なのです。それはまるで旧約聖書と新約聖書のように、

イスラエルと教会、ユダヤ人と異邦人のように、二つのものを一つにする、神様のご計画を象徴するようなしるしです。私たちクリスチャン、教会にとってはこの第二のしるし、すなわち空中再臨が希望です。しかしイエシュアの目的はあくまで空中ではなく地上に再臨することです。そしてこの地上にイスラエル王国を再興し、御国を建て上げること、すなわちカナの婚礼に示された第一のしるしを実現することですから、私たちもイエシュアの花嫁なる教会として、イエシュアが見つめておられる先を、同じように見つめる者となるよう求めていきましょう。